

十の王国

2025年11月23日

ダニエル書 7章19～24節 8章1～26節

序：大患難期の前に起こること

(1) (時系列)

- ☆①世界戦争
- ☆②イスラエルが国家として再建（離散している地から帰還）
- ☆③ユダヤ人のエルサレム奪還・統治
- ★④北からの数ヶ国の連合軍がエルサレムに侵攻
- ★⑤世界統一政府の出現
 - ⑥十の王国（世界統一政府が分裂）
 - ⑦反キリストの台頭
 - ⑧一時的な平和と安全（⑥と⑦が進行中）
 - ⑨反キリストとイスラエルの7年の契約（大患難時代のはじまり）

(2) (どの段階で起こるか不明)

- ①暗黒（第一回目、全部で5回）
- ②エリヤの到来（メシア再臨の備え）
- ③第三神殿
- ④教会の携挙
- ⑤キリストの御座のさばき（携挙された信者への報奨）
- ⑥キリストと教会との婚姻

⑤⑥は④の結果

本日の箇所：患難期前に起こること、時系列の⑥十の王国

I. 四つの異邦人の帝国（ダニエル2章、8章）

- (1)バビロン
- 雄羊 (2)メディア・ペルシャ
- 雄山羊 (3)ギリシャ
- (4)第4の帝国（ローマ：東西に分裂 ⇒ 東：ロシアとイスラム諸国
西：民主主義国家

II. 世界統一政府

(1)患難期前に起こる第5の出来事

(2)第四の異邦人帝国

- ①最初のステップはローマ帝国
- ②東西に分裂 東：A.D. 364～1453 ⇒ ロシア
- 西：A.D. 364～476 ⇒ フランス、ドイツ
- カール大帝 オットー一世

各々が神聖ローマ帝国と呼ぶ

③東の核＝ロシアとイスラム諸国

④西の核＝民主主義国家

(3)二つは現在まで並行している（均衡）

(4)東西がバランスを欠いて、世界統一政府への道が開ける

- ①ロシアと5ヶ国の連合軍がイスラエルに侵攻
- ②連合軍はイスラエルで滅びる

- ③ロシア国内もさばきを受けて、再起困難な状態になる
- ④東側の勢力が消滅、西側だけになる

(5)世界統一政府の時代

III. 統一政府が10の国に分裂 ダニエル 7・24a

- (1)統一政府が崩壊した後、十の王国が立ち全世界を支配する
- (2)患難前に始まる10の王国の支配の時代は患難期の間まで続く
- (3)十の王国時代の後、反キリストの支配が始まる
反キリストは患難期が始まる前には生まれている
∴患難期の始まりのしるしは反キリストとイスラエルが同盟を結ぶこと

反キリストは10人の王たちとは別の支配者としてだんだんと頭角を現してくる(自分に服従しない3人の王を殺す、追隨する他の7人の王は生かす)

反キリストがイスラエルとの同盟関係を破棄して神殿を乗っ取り、自分を神として崇拜することを要求するのは、患難期後半(3年半)からである
彼の本格的な全世界支配は明瞭となる

IV. まとめ

- (1)二度の世界大戦を通して、反ユダヤ主義、続いてきたユダヤ人迫害の歴史が転換点を迎える

- ①イスラエルの再建国承認(1948年 国連)
神からは、アブラハム契約によって土地取得の約束あり
しかし、不信仰・不従順のゆえに流浪の民・寄留の民 ⇒ 約束の地
- ②エルサレムの旧市街地を奪還(1967年 6日戦争)
ユダヤ教の礼拝・祭儀復活のため
神殿の再建

これで、世界の中の独立した一国家として認められる(国を持つ民)
国家として条約締結(政治、軍事、貿易、金融等)
患難期に入る時、反キリストと同盟を結ぶには、一国家となっていることが前提

エルサレムに神殿が再建され、礼拝・儀式がささげられるようになっている
反キリストが神殿での礼拝をやめさせ、自分を神の座につけて礼拝を強要する
患難期の間まで

- (2)北の諸国連合のイスラエル侵攻によって、分裂した東西ローマの東側が消滅
西だけが残る

- ①世界統一政府の出現
- ②世界統一政府の崩壊 ⇒ 十の王国へと分裂
- ③十の王国の王以外の支配者が台頭して全世界を動かすようになる
||
反キリスト

- (3)時系列の出来事で、今までに成就しているのは①②③である

- (4)今後起こると預言されている出来事を聖書から学んで知って、信仰によって世界の状況を注視し、必要に応じてほかの人たちにも伝える
新聞、TVを基にした解釈には要注意